

## 研究会・シンポジウム報告

2018 年 12 月 3 日（月） 定例研究会報告

テーマ： 「敬意・信頼・友情：未来を形作る外交への礎石 ―日・スリランカ包括的パートナーシップの事例」

“Respect, Trust, & Friendship: Cornerstones of Diplomacy for Shaping the Future  
— The Case of the Japan - Sri Lanka Joint Comprehensive Partnership (JCP)”

報告者： モンテ・カセム博士 Dr. Monte Cassim（大学院大学至善館 学長）

時 間： 16:30～18:00

場 所： 専修大学神田キャンパス 7 号館 782 教室

参加者数： 11 名

報告内容概略：

本年度春季実態調査をスリランカにて実施予定であることを踏まえ、至善館大学大学院学長、及びスリランカ首相府上席顧問であるモンテ・カセム博士をお招きし、スリランカについてご講義をいただいた。

第二次世界大戦の戦後処理において日本分割の危機を救い戦後賠償を放棄して以来、スリランカは日本と良好な関係を築いてきた。スリランカの親日的な立ち位置が打ち出されてきた背景と状況を辿り、今日に至るまで発展を続けてきた二国間関係を検証した。特に、科学技術・経済関係などを網羅する協力関係である「日スリランカ包括的パートナーシップ（Japan-Sri Lanka Joint Comprehensive Partnership）」（2015 年）の特徴と役割について取り上げ議論した。同枠組みでは、インド洋ハブとしての開発やコロンボ＝キャンディ＝トリンコマリー交通軸開発等の戦略的焦点を柱に、優先分野として経済連携、政治連携、スリランカの開発計画との調和、日本の開発協力の可視化などが議論されてきた。特に経済連携については、インフラストラクチャー、投資、輸出の分野での取り組みが計画されており、スリランカの開発計画との関係では、国内の地域開発の諸計画が含まれている。これらの包括的な計画の個別の実施段階においては、電気エネルギー・電気自動車等が適切に導入されるなど、多くの科学技術の創造的な活用が期待される。

記：専修大学経済学部・飯沼健子

2019 年 2 月 2 日（土） 定例研究会報告

テーマ： 「スリランカ社会の諸問題」

報告者： 中村 尚司（龍谷大学名誉教授、特定非営利活動法人パルシック理事）

時 間： 14:30～17:00

場 所： 専修大学生田キャンパス社会科学研究所

参加者数：14 名

報告内容概略：

スリランカの歴史社会的特徴、例えば諸外国との関わり、スリランカの民族関係についての歴史的な背景など、歴史社会的分析を通して、現代スリランカの社会的諸問題の糸口を探った。

歴史上長期的に見ると、古くから世界各地の使節・艦隊・調査団などがスリランカに寄港したが、スリランカをどう捉えどう関わったかに、スリランカの当時の状況と異文化間関係が示される。

民族の問題については、王国時代の歴史的な経緯を詳細に見ると、スリランカ史におけるタミル人の重要性はいずれの時代からもうかがえる。植民地経済においては、プランテーション（当初はコーヒー栽培であったが、ブラジルでコーヒー生産が始まり、スリランカでは 20 世紀に紅茶に切り替えられた）に南インドからタミル人労働者が移住させられ、シンハラ人は関連産業に従事するという状況があった。1948 年の独立後、スリランカ政治で民族関係が悪化したきっかけは、1956 年にシンハラ語が唯一の公用語とされた後、法律の制定、大学教育、公務員試験などをシンハラ語で行う決定がなされたことであった。これにタミル人が強く反発して紛争に発展していった。

質疑応答では、スリランカの現実における共同体の共的なものについて、土地制度史について、スリランカにおける自由な労働者・中産的生産者層について、スリランカ女性の相対的な地位の高さなどについて討議が行われた。

記：専修大学経済学部・飯沼健子